

## 〈彙報〉

### 平成五年度 国文学科活動報告

#### 文学遺蹟めぐり―飛鳥方面―

日時 平成五年五月二十七日（水）

行程 長堀駐車場（集合）―飛鳥資料館見学―石舞台見学

（昼食）―伝承板蓋宮跡―飛鳥寺―甘樫丘―難波（解

散）

対象 国文学科一、二年生全員

今年度の文学遺蹟めぐりは、隔年恒例になっている「萬葉のふるさと―飛鳥―見学」として実施しました。引率・解説をする我々教員は、こうした行事の繰り返しの中で年齢を重ねて行くけれども、対象とする学生たちは毎回若々しく、「歳歳年年同じからず」の感をあらたにする。飛鳥を訪れるのは初めてだと言う学生もいて、後日提出させたレポートには、新鮮な印象が記されていた。見学箇所は、国立飛鳥資料館―石舞台―板蓋宮伝承地―甘樫丘をポイントに、板蓋宮伝承地からの後半部は、明日香風に吹かれながらの飛鳥路散策とし

た。

資料館前で「飛鳥」の概要を話した後、入館して、飛鳥学習の予習。石舞台古墳で記念写真、昼食。歩いて思わずかな距離であるが、伝承板蓋宮跡地近くまでバスで向かう。皇極天皇の御代の大化の改新について解説しつつ、「今、皆さんの立っているあたりに蘇我入鹿の首がころがつていたかも知れません。」と話すあたりで、いつとき学生たちのざわめきが起る。田中の道を北にたどれば、入鹿の首塚、そして飛鳥寺。「世の中は何か常なる飛鳥川」（『古今和歌集』）とも詠まれている飛鳥川を渡って、最後の目的地「甘樫丘」へ。

丘に登る途中に、

采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く

―志貴皇子―（一―五一）

の萬葉歌碑があり、志貴皇子の人と作品について解説をする。さらに頂上展望台で、飛鳥学習の復習・まとめをして予定の行程を終える。

「現地で文学や歴史を学ぶことができてよかった」、「今度はもっとゆっくりと見学したいと思った」との学生からの感想を聞いて、今回の遺蹟めぐりが、殊に国文学科に学ぶ学生たちにとって有益なものであったことを喜んでいる。（K）

## 国文学科講演会

日時 平成五年六月二十四日(水) 第五・六時限

対象 国文学科一、二年生全員

会場 南港学舎講堂

講師 相愛女子短期大学名誉教授

中野 恵海先生

演題 「近代文学の鑑賞」

平成五年度・国文学科講演会(国文学科主催)は、本学、本学科で長年にわたり、日本の近・現代文学の講座を担がされた中野恵海先生に、あえてお願いした。かつての職場でもあり、他の場所での講演とは違って、「少し心が重くもある」と漏らされた先生に、しかし、気安く引き受けて下さったことに、まず深甚なる謝意の念を表しておきたい。

人は誰でも青春を持っているとは言わずもがなであるが、こと多感な文学青年においては、その意味するところは大きく異なる。否、「始めに文学青年ありき」ではなくて、青春の時、青年はいかにして文学青年に変身していったか、その「私と文学との出会い」から、先生のお話しは、まず始まった。

一七・八歳の中野青年は、ひよんな事から、それも無理矢理に友達から、石坂洋次郎の『若い人』を、三円で買わせら

れた。そして三円の手前、青年は、義務的に『若い人』を読むことになる。『若い人』は、中野青年において、近代文学というものに接した初めての出来事であった。

しかし、青年は、やがて『若い人』に耽溺します。『若い人』そのものを読んでいるということが、むしろように楽しかった。「とにかく自分には『若い人』がある」、「『若い人』なしの自分は考えられなくなった」と、そんな思いでしょうかと、先生みずから述べられた表現は、ことに印象的であった。文学青年は誰でも、その青春と分かち難い作品を持っていよう。石坂洋次郎の『若い人』は、中野青年の、文学におけるまさに初恋の人であった。

ひとたび、文学という恋に目覚めた青年は、爾来、室生犀星、谷崎潤一郎、泉鏡花……と、日本の近代文学を熱愛していく。それは、心身ともに、何物かにかぶれ、毒され、病気にかかる様である。そして、先生の熱心が最も高潮に達するのは、泉鏡花においてであった。世に、「鏡花宗」という宗教があるという。如何なる宗派かといえば、「鏡花以外の作家の文章は、おもしろくなくなる」という宗派、煙草の禁断症状にもにて、「一日一回は、必ず鏡花の文章を読まなければ気が済まない」という宗派である。

当然のこととして、中野青年は、大学は国文学科を選び文学に直進し続ける。やがて卒業論文に、「日本自然主義文学」

という、途方もない大テーマをたてるが、このテーマの實際上不可能なことで、卒論指導教授の「源氏物語」の専門というところもあって、「源氏物語」を卒論に決める。吉沢義則著「対校 源氏物語新釈」を頼りに、二ヶ月で「源氏物語」を読破、百枚の原稿用紙を、卒論としてうめた。

大学卒業後も、先生の文学に勤しまれたことに変わりはない。日本文学のみならず、「ドストエフスキー全集」も読み始められた。図書館に入る時と、文学作品を読み終えて図書館から出て来た時との、なんと私（先生）の心の違っていることか。文学という大きなシンホニーが、私（先生）の心の中で共鳴し続けている。

ドストエフスキーの「死の家の記録」は、兵隊に行かれる時も、先生は持つて行かれ、戦地でも読まれたという。文学は、先生の心の支えであり続けた。以後、先生は国語教師となられ、現在に至る。

「若い人」との邂逅は、先生の心の裡でいつまでも日射を浴びていた。文学は死なない。死ぬことを拒否するのみならず、古いことでも現在であると主張する。文学が酔わせながら醒めさせるものであるとすれば、国文学科の特権のようなご講演であった。(T)

## 国文学科芸能鑑賞（文楽）

日時 平成五年十一月十一日（木）

午前十時三〇分から午後三時三〇分

場所 国立文楽劇場（大阪市中央区日本橋一―二―一〇）

参加者 短期大学国文学科一、二年生全員

専任教員・助手

平成五年度の芸能鑑賞は文楽十一月公演のうち、「菅原伝授手習鑑（寺子屋）」「桜鑄恨鮫鞘」「景事釣女」を観ることとなった。「菅原伝授手習鑑」は、浄瑠璃の三大名作のひとつとして夙に有名な作品であるが、そのことと学生達の親しみやすさとは別問題であろう。鑑賞にあたり、事前にプリント等を配付し、理解に務めることにした。

初めて国立文楽劇場に足を運んだ人も多かったようで、文楽まわしによって、太夫と三味線の交替がなされた時に歓喜するなど、その素直な反応ぶりに、新鮮な驚きすら感じさせてくれた。実にストレートな反応——そのことがいくつかの問題点を浮き彫りにしてくれたのではなかったらうか。

たとえば「寺子屋」。わが子を身代わりに立てた松王の述懐、千代の悲痛なクドキが見所の一つであることは言うまでもな

い。学生達も独特の緊迫感を感じ取つてのことか、熱心に観入つていたように思われる。にもかかわらず、果たして何人の学生がその内容を十分理解できたのかというと、甚だ疑問に思わざるを得ないのである。それは何も、その文体に学生がついていけないというだけではないだろう。人形の動きの少ない、登場人物のコトバで展開する舞台にあつて、人物の語り分け、内容の正確な伝達がなされないならば、学生達は如実な反応をみせてしまう。売店で売られる床本集なしには内容が聞き取れない、誰の言葉なのかわからないでは、一時間三〇分近くも座つたままでいることなど、現代の若者には酷な話というものであろう。

捉われない素直な反応はまた、時として新鮮な視点も提示してくれる。たとえば「桜鑄恨鮫韃」。口うつしで遺言を覚え込ませる点が異色であることや、夫や子を思うお妻の愛情の深さなどが、鑑賞ガイドの類で見所とされている。だが、先入観のない学生達が、むしろ、娘お半の身の哀れさにより関心を示していた点は、非常に興味深く思われた。

総じて、学生達にとつて「釣女」がむやみにしゃちほこばることもなく、気軽に笑え、人形・太夫・三味線、その一体感を堪能できたのではなかつたらうか。「寺子屋」を重要視し、プリント作成した者にとつて、身を乗り出して「釣女」を観ていた学生達の姿が妙に印象に残つた。

(Y)

以上の他に、国文学科研究室の関係する行事として、相愛女子短期大学公開講座があつた。「人間教養講座」というテーマで、全八回行なわれ、盛況を博した。

### 相愛女子短期大学土曜公開講座

#### — 人間教養講座 —

8	7	6	5	4	3	2	1
12 / 18	12 / 4	11 / 20	11 / 6	10 / 16	10 / 2	9 / 18	9 / 4
健康とスポーツ	人ときのこ — 食用・薬用・毒きのこ —	カザルスの人間性と芸術	子どもに人間の輝きを	色と人間	萬葉人と佛教	ジャイナ経説教文学の世界	二十一世紀と人間
吉武 勝之 本学非常勤講師	田中 昭子 本学教授	依藤 里子 本学助教授	斎藤 浩志 本学教授	宮原 清水 本学助教授	北谷 幸册 本学教授	新井 俊一 本学教授	中西 智海 本学学長

相愛萬葉ウオーク

— 山の辺の道を巻向から石上布留の社へ —

第三回相愛萬葉ウオークを、次のように行いました。

日時 平成五年十月十一日(月) 振替休日

行程 J R巻向駅—景行天皇陵—崇神天皇陵—長岳寺—柿

本人麻呂歌碑—環濠集落—内山永久寺跡—石上神宮

講師 北谷 幸册(本学教授)

対象 国文学科学生有志・卒業生・同窓会会員・一般

※第四回相愛萬葉ウオークは、平成六年十月九日(日)、J R及び近鉄天理駅前集合(十時)、石上神宮から和爾の里(榛本)まで歩きます。

相愛萬葉ウオーク—山の辺の道(二)—に参加して

中田 祥子

第三回相愛萬葉ウオークは、山の辺の道を巻向から石上布留の社(石上神宮)まで歩きました。絶好の秋晴れに恵まれて、昨年よりも多い百二十余名の方々が集まり、北谷先生のご挨拶の後、爽やかな気分でお出発しました。

三諸のその山並に児らが手を巻向山は継ぎの宜しも

(巻七・一〇九三)

あしひきの山川の瀬の鳴るなへに弓月が岳に雲立ち渡る

(巻七・一〇八八)

三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなまかくさふべしや

(巻一・一八)

と歌に出てくる大和の山々を確認し、歌にこめられた作者の気持ちや味わいながら、山の中へと歩いていくと、しだいに山の辺の道らしい風景が見えてきます。

龍王山などの雄大な山を背景にして、のどかな田園風景が広がり、柿畑やみかん畑、野道には栗や秋の草花が、私たちが楽しませてくれました。景行天皇陵をはじめとする古墳群を目前にして、驚嘆しているうちに、しだいに古(いにしえ)の世界へと引き込まれていきました。昼食予定の長岳寺に到着。山門入口にある(根上がりの松)の根の強さと生命力の凄さに圧倒させられてしまいました。すぐにお弁当を開いている人や、熱心に拝観する人など、それぞれの昼食時間を楽しんでいるようでした。時折、境内に鐘の音が鳴り響くと、秋の情緒を満喫した気分になって、お弁当の味も格別なものとなりました。長岳寺(釜の口大師)は、天長元年(八二四)淳和天皇の勅願により弘法大師が大和神社の神宮寺として創建された由緒ある寺であり、日本最古の鐘楼門や玉眼の仏像(いずれも重要文化財)が有名だそうです。由緒ある雰囲気

の中でそうめんや抹茶を戴くこともできるようですが、時間  
に限りもあり、少し未練を残しながらの出発となりました。

一面に広がる田んぼの畦道を歩いていくと、私がつとも  
氣に入つた風景の衾道に出て来ます。ここに柿本人麻呂の歌  
碑があります。

衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし

(巻二・二二二)

かつての衾道は、私の感じた思いとはうらはらに、亡くな  
つた愛する妻を引手の山(龍王山)に葬つてこの山道を行く  
と、生きている気がしないと歌っている柿本人麻呂の悲しみ  
が伝わってくるような道だつたようです。この衾道一帯には  
西殿塚古墳などの古墳や墓地が多く存在し、古代豪族の埋葬  
地であつたそうです。人麻呂の歌のような思いをした人たち  
が、通つた悲しい道だつたようです。

それから萱生・竹之内の環濠集落を通つて、着いた夜都岐  
神社は「大和名所図会」にも載つている古社で、今はひっそ  
りと鄙びてみえますが、離れて建つ二つの鳥居から想像して  
みても、立派な神社だつたのではないかと思われます。

ここから東海自然歩道を、今回の最終目的地である石上神  
宮まで歩いていきます。途中、峠の茶屋で小休止。古代の人  
たちも、同じようにここで一服していたのかなと思つたりし  
ました。平安時代に鳥羽天皇の勅願により創建され、明治時

代に廃寺となつた永久寺跡を通り過ぎると途中に、鏡池とい  
う池があります。その池には(馬魚)といわれる馬の顔をし  
た魚が住んでいるらしいという先生のお話に一同から笑いが  
起こりました。何年か前に人気者となり話題になつた人面魚  
なら、聞いたことがあるけれど、馬魚ってどんな魚のかな  
あ、とその魚の姿を想像してみると、ひとりでに笑いが込み  
上げてきました。

境内にたくさんいた鶏に迎えられるようにして、今回の最  
終目的地である石上神宮に到着しました。神氣漂う森の中に  
ある石上神宮は、見事な神杉によつて、より厳肅な雰囲氣を  
醸し出しています。

末通女らが袖布留山の端垣の久しき時ゆ思ひきわれは

(巻四・五〇一)

の歌碑があります。他に、

石上布留の神杉神さぶる恋をも我はさらにするかも

(巻一・二四一七)

石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君ならなくに

(巻三・四二二)

石上降るとも雨にさはらめや妹に逢はむと言ひてしものを

(巻四・六六四)

というように、石上にまつわる歌(恋愛の歌が多い)が萬葉  
集に多く歌われています。

今回の萬葉ウォークも、あつという間に過ぎてしまいました。前回出会った方や、新しく参加された方とも、ふれあうことができて、たいへん嬉しく思っています。先生の解説を拝聴しながら、みなさんとともに山の辺の道を歩いて、大和の古代ロマンの世界に浸ることができ、とても楽しい一日を過ごすことができました。慌ただししい生活の中で、日頃忘れかけていた心のゆとりというものを、改めて感じるようになりました。次回もぜひ参加したいと思っています。

(国文学科昭和六〇年三月卒業生)

## 平成五年度 国文学科講義題目

文学概論	文学概論	国文学史II	国文学史I	国文学講読	古事記中巻の講読	古事記	更級日記	平家物語	平家物語	上田秋成の文学	近代の随筆(評論)を読む	石川啄木の歌と手紙	国文学演習	萬葉集の研究	源氏物語と紫式武	新古今和歌集	近世小説と伝承芸能	
小林 豊	柿谷 雄三	鳥井 正晴	土井 順一	安藤 武彦	池川 敬司	森崎 光子	橋本 雅之	真下 厚	榎野 廣造	鈴木 徳男	下西 忠	山本 和明	上田 博	田口 道昭	北谷 幸册	柿谷 雄三	鈴木 徳男	山本 和明